

「早生まれの選手の育成に関する問題と補欠ゼロ」

から考えるサッカー文化とタレント養成

県指導者養成委員長 池谷 孝
(清水エスパルス)

はじめに・・・2014 ブラジルワールドカップから…時間をかけて個を育てチームを作る

2013 年秋にUAE で観戦したU17 世界大会は日本が非常に組織的な色彩を色濃く出して戦ったのとは異なり、日本以外の多くの国々の選手がまだ個の部屋にいて、個人とボールと相手の関係でサッカーをしていたように強く感じました。

ブラジルワールドカップを観ますと、それらの国々のチームの選手がチームの部屋に入って組織的に速く正確にタフにサッカーをやっています。2015 年のU20 の世界大会を観て育成のつながりを確認したいと思います。敏捷性、ボール技術、機動性というような日本人のストロングポイントであるといわれてきた部分が、ラウンド16 に進む国では数十パーセント日本よりクオリティが高いように感じました。比較論から生まれるこれまで言われてきた日本人の特性を生かしたサッカーの方向性の単一的決め方に対する疑問、これから向かうサッカーの方向性に対して興味津々なのは私だけでしょうか。

「シュートを決める選手」、「ボールを奪う選手」、この2人は個人主義的な育成環境から生まれるように思います。自己責任という意味でもインパクトのある強い個性が求められるところです。個人主義という言葉のニュアンスはむずかしい解釈ですが、日本にも強いメンタリティを持った、サッカー上のスペシャリストを育て組織に組み込んでいく発想がもっと強くあっていいと感じます。古い話ですが次代の釜本邦茂さんを育成することを強く意識しながら日本人のストロングポイントを見定めて生かしていく必要があるように感じます。小さいころからチームワークや組織の中で育てられた子どもから規格外は生まれづらいように思いますがいかがでしょうか。

育成については、誰かが方向性を出すというよりは各チームの指導者一人一人の見識と想像力が必要で、大人の指導者の力が試されるところです。

早生まれ選手の育成に関する課題

さて、早生まれの子どもが、ゲームに出ていない、サッカーを続けている子どもが少ないという、つまり早生まれの才能がスポイルされている問題です。世界レベルの大会の参加年齢が1月で始まりますから、各年代の日本代表レベルでは1, 2, 3月の選手の選手人口が少ないことは大きな不利になるように思います。人間は1年に各月ほぼ同数生まれますから、早生まれの子どもがゲームで活躍していないとか競技人口自体が少ないということはサッカー界にとって大きな損失です。おそらく大会というゲーム環境が試合に出る子どもと出ない子どもを早期から固定しているように思いますが、それが何歳くらいから起こるのかはいま調べています。

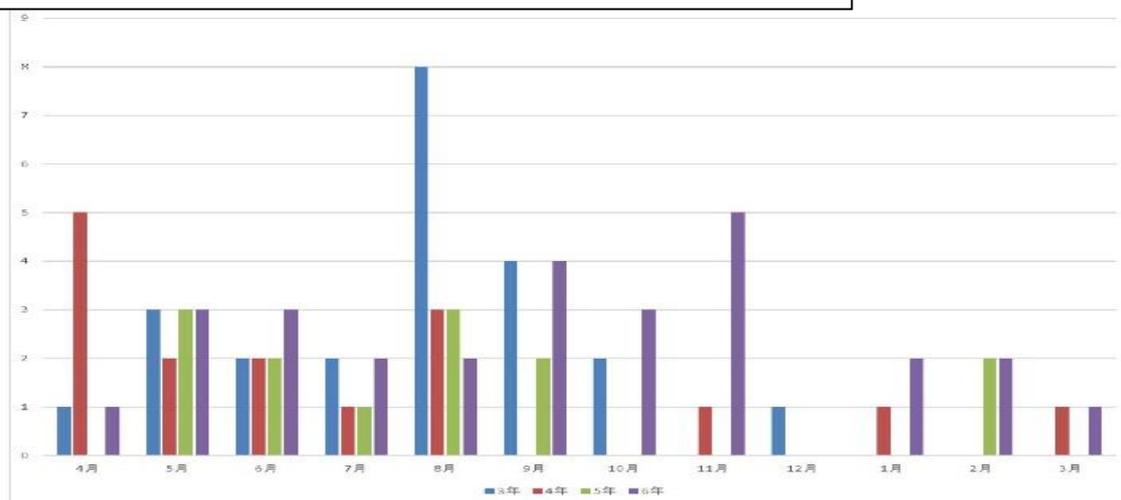
一般的に高校年代では早生まれの選手数は少なくなっています。その段階ですでに手の施しようがないのでやはりキッズ、U10 辺りまでの育成の初期段階での大人の工夫が必要だと思います。ドイツでは早生まれ対象のサッカーも模索しているようです。慶応の幼稚

舎では、入舎試験を生まれ月別に分けて行い発育発達段階の利益不利益が出ないようにしていると聞きました。ぜひご自分のチームの分布も調べてください。

この問題は、補欠ゼロのサッカー環境にも直結しています。つまり、誰でもどこでもいつでもスポーツを楽しめる環境があることがスポーツの基盤であり文化であり、その大きな裾野からさらにスポーツがポピュラーになり、広い裾野からタレントが出てきてそのスポーツを強くする、というスポーツ文化や環境の原理に従えば、早生まれも補欠ゼロも根っこではつながっていて、ピラミッドの頂点である優れた選手育成の基本をなしているということです。これらははじめに述べた、育成の方向性や各カテゴリーのチーム作りの問題と同じく、サッカーにかかわる指導者の知識やクオリティとして考えるべきテーマの一つだと思います。いかがでしょうか。

以下に分布グラフを添付します。

2014 エスパルス U10アカデミージュニア清水生まれ月人数



2014U13 静岡県トレセン韓国遠征生まれ月人数

